

夷川船溜りにおける水泳場としての空間再利用の変遷に関する研究

Study on Transition of Spatial Reuse as Swimming Pool in Ebisugawa Berth

岡田 昌彰* 文字 拓哉**

Masaaki OKADA Takuya MONJI

Abstract: Biwako Waterway, completed in 1890, includes the Ebisugawa Berth which possessed the largest rectangular area along it and had been originally used as landing stage or moorage for shipping. On the other hand, new use, such as swimming pool had been added to this facility and kept intensive connection with surrounding communities. Especially, the function as swimming training school starting in 1896 made significant influence to the development of swimming culture locally and nationwide. This study attempts to manifest the transition of its reuse as swimming training pool through the analysis of local historical documents, newspaper articles, and hearing survey to relating organization, such as Tousuikai or home for the aged. As conclusion, it was found out that they took advantage of rectangular surface of water formed by shipping function, and had developed Ebisugawa Berth as place for human activities, which succeeded to obtain high social status as one of the most prestigious swimming pool where national swimming meet was held and visited by Japan's royal families, and also had been enjoyed by local children in elementary schools as popular swimming pool after the war.

Keywords: Berth, Ebisugawa, Tohsuikai, Biwako Waterway, Swimming Pool

キーワード：船溜り，夷川，踏水会，琵琶湖疏水，水泳場

1. 研究の背景と目的

船溜りとは、運河や河川において水路の拡幅された水域施設を意味し、舟運における旅客移動や物資運搬のための拠点としての役割を果たしてきた。1890年に竣工した琵琶湖疏水の鴨東運河の西端に位置する「夷川船溜り」(図・1・写真-1)は京都市北東部の左京区に位置し、疏水沿川に存在していた船溜りのうち最大の矩形平面(78m×81m)をもつ。かつては荷揚げ場や船の停泊地として使用され、流通の中心的存在であった。一方、この施設には新たな用途が付加され、地域生活とも密接な関係を維持してきた。特に1896年に開始される水泳講習場としての機能は当該地域のみならずわが国の水泳界においても大きな役割を果たすこととなる。

この付近に現存する夷川発電所は2001年に土木学会の選奨土木遺産に認定され社会的注目を得ているものの、このようにユニークな空間再利用の歴史をもつ夷川船溜りについては社会的認知度は低く、その再利用の実態や西日本を代表する水泳場としての

輝かしい歴史について明らかにされてこなかった。本研究では、特にその水辺空間を活かした水泳講習場としての再利用の歴史に注目し、地域史料、新聞記事、及び「踏水会」など関連機関へのヒアリング調査を通して得られた情報を分析し、水泳場としての空間再利用の変遷を明らかにすることを目的とする。

河川改修や沿岸部の工業地帯造成に伴い副次的に生成した水辺空間を水泳場として利用する事例は戦前の日本各地に見られる。例えば大正時代の東京都荒川放水路沿川における、河川敷の土砂を採掘した後に生成した池を利用した水泳場¹⁷⁾や、昭和初期の京浜工業地帯における、工業運河の浚渫土砂によって形成された「扇島」における海水浴場¹⁸⁾などが挙げられる。本稿で扱う船溜りは、後述のように水泳場として適当なサイズの矩形平面をもつ点、及び京都市都心部というアクセスの良好な場所に位置している点において、水泳場としての有利な条件を具備していたものと考えられよう。その意味では船溜りの水泳場利用には「必然性」すら認められ得るが、これほどに特徴的な水辺空間利用の歴史が現在まで明らかにされてこなかったことは社会的課題であると言えるであろう。

琵琶湖疏水と都市形成に着目した研究として田中らの研究^{1) 2)}が挙げられる。ここでは、琵琶湖疏水の安定した水位調節機能及び機能的な路線形態・河港施設が沿川の都市形成に及ぼした影響について、岡崎地区、鴨川沿川地区、祇園白川地区を対象として明らかにされている。さらには絵画・写真のほかヒアリング調査に基づき近世から近代の「舟運」を基軸とした都市・景観形成過程を明確化している。一方、京都市文化市民局文化財保護課は2005年に近代化遺産に関する調査報告書³⁾を刊行している。ここでは夷川開門や発電所のほか船溜りについても紹介されているが、その詳細については記述されていない。

2. 研究の方法

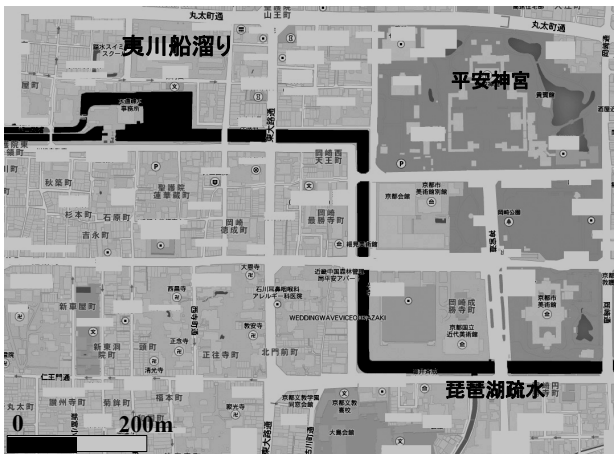
本論文では、歴史文献⁴⁾⁷⁾及び新聞記事⁸⁾¹³⁾に記述されている



写真-1 現在の夷川船溜り(筆者撮影)

*近畿大学理工学部社会環境工学科

**八千代エンジニアリング株式会社 総合事業本部



図一 夷川船溜りの位置

当該地域に関する情報を収集し、さらに水泳講習場としての再利用を先導的に進めた「踏水会」関係者¹⁴⁾ならびに付近に立地する老人ホーム¹⁵⁾にてヒアリング調査を行うことで、戦前から続く夷川船溜りの利用実態の変遷を把握した。さらに、同ヒアリングによって夷川のほか 10 カ所に整備された各船溜りの再利用についても明らかにし、夷川船溜りの位置づけを明確化した。

3. 夷川船溜りの概要と経緯

夷川船溜りは 1890 年に竣工し、荷揚げ場や船の停泊地として本来の機能を全うしてきた。この機能が当地において失われていく過程に関する具体的な史料は本研究において発掘できなかったが、少なくとも 1948 年には蹴上のインクラインが停止し、1951 年には琵琶湖疏水における疏水船が消滅していることから²¹⁾、少なくとも戦後直後以前には本来の機能が後述の水泳場機能と共存していたものと考えられる。

2013 年 8 月現在の夷川船溜りは、竣工当初の船溜りとしての機能、あるいは後述のような水泳場としての機能は全て消失しており、貯水池及び上流にて合流する白川と琵琶湖疏水の洪水調整池としての役割を果たしている。また、南側には琵琶湖疏水竣工 100 年記念事業の一環として 1989 年に京都市上下水道局により整備された藤棚があるほか、同事業ならびに桂ライオンズクラブの 25 周年記念として 1990 年に再建された北垣国道(1836-1916)の銅像がある。京都府知事を務めた北垣は琵琶湖疏水計画における中心的人物としても知られているが、彼の功績を称え、1902 年に市参事会の議決によって夷川船溜りの中島に彼の銅像が建立された。第二次世界大戦中には金属供出により銅像は一旦撤去され台座だけが残存していたが、この上に約 50 年ぶりに銅像が再建され、現在に至っている。

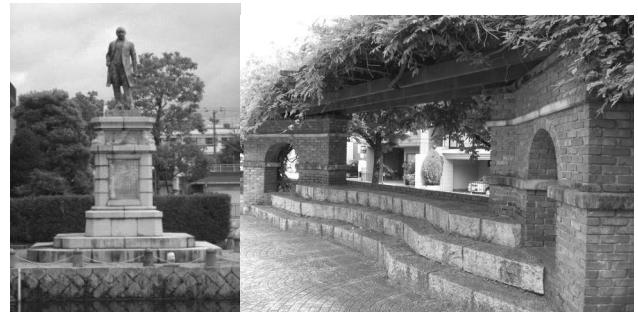
このように、当地には「琵琶湖疏水」という明治の大偉業を称える記念物が現在も設置されており、その歴史を現代に明確に伝えていると言える。しかし、後述のような水辺空間再利用という特徴的な歴史については何ら扱われていない現状にある。

4. 夷川船溜りの変遷

(1) 戦前の夷川船溜り

1) 水泳講習利用の胎動

夷川船溜りにおける水泳講習は、2 人の京都市政財界の中心人物によって胎動する。殖産家・教育者として知られる高木文平(1843-1910)及び明治大正時代の政治家・実業家として知られる雨森菊太郎(1858-1920)は、1896 年春に東京隅田川の水泳指導を視察し、京都の子供たちにも遊泳場が必要であると考えた。その後高木と雨森は、下総国佐倉藩士笹沼勝用が唱えた「笹沼流」の游泳術教師であった大竹森吉氏と面会し、氏を指導員として夷



写真一 琵琶湖疏水完成を称える現在の夷川船溜り(筆者撮影)
(左)再建された北垣国道の銅像 (右) 藤棚

川船溜りを水泳場として利用する計画に着手する。高木と雨森は、平安奠都 1100 年を記念し、古武道の保存奨励を目的に結成された全国的武術団体「大日本武徳会」(第二次大戦後解散)の評議員も務めていたが、当会に「游泳部」を設け水泳講習を開始すべく、全国から義金を収集し特別予算も設けている。さらに、政財界にも働きかけ、1896 年 6 月 12 日の評議員会決議では人的整備に加え夷川船溜りの借用、仮小屋建設許可、新聞広告の掲載など総合的な計画を始動させた。同年 7 月 11 日には教師 5 名、生徒 84 名の募集に成功し、京都初の水泳講習を夷川船溜りにて開始するに至っている。同年 9 月 10 日の終講日には生徒数は 4 割増となり、水泳講習が当初から京都市民に広く受け入れられていたことがわかる。

夷川船溜りは、水泳場となり得るような空間の条件を満たしていた。1961 年に発刊された「学校用プールの設計」¹⁹⁾、^{補註(1)}には、海浜や河川、湖沼のような「自然の水泳場」の具備すべき条件、すなわち安全性(潮流、水流、波の少なさ等)、指導管理の利便性(流れの静穏さ、見渡し、準備体操のための十分な空間の確保等)、広さ(事故を発見した場合に直ちに救助し得る広さ)などが挙げられている。一方、競泳用のプールについては、長軸方向 25-100m、短軸方向は 6~8 コースで約 12m 程度とすることが記述されている。この条件は、1993 年発刊の文献²⁰⁾における「25m×11m, 50m×15-21m」という値とも大きくはかけ離れておらず、競泳用プール設計における共通した理想的サイズと考えることができる。夷川船溜りは上記「自然の水泳場」としての条件を満たしているほか、78m×81m という平面は図-4 のようにいくつかのパーツに足場などで区切ることで適当な面積を確保することが可能であった。すなわち、水泳場として再利用され得る空間的条件を具備した水辺空間であったものと捉えることができる。

2) 先進的運営

発足後、大日本武徳会游泳部は先進的な運営を行っている。男子游泳部のほか 1904 年には当時としてはきわめて先進的な「女子游泳部」を設けた。当初講習生が僅か 10 名であったため翌年には一旦廃止されるが、1917 年に再設置されている。

また、1921 年には「夜間部」、1930 年には「婦人部」を設置し、日中業務や家事に従事する成人層を対象として夕方から照明を使用し水泳講習を行っている⁶⁾。現代のスポーツクラブにも通じる先進的運営がここに行われていたことがわかる。

3) 西日本水泳の中心地へ

1896 年からは毎年 8 月末に遊泳大会が催され、夷川船溜りに所属する水泳講習生による水泳大会が行われた。演技項目は、享保時代(1716~1736)の熊本藩士村岡伊太夫政文が創始しその子小堀常春が完成した「小堀流踏水術」を基本としたものであり、御前游、水書、手繰游といった演技が披露されたとの記録がある。後述のように、戦前は「武徳会青年演武大会」、戦時中は「壮丁游泳大演習」、戦後の京都市による運営期は「游泳大会」、そして踏水会の運営開始から水泳場廃止となる 1969 年までは「踏水会游

泳大会」と名称が変更されながら、水泳大会は存続していく。

これに加え、1897年からは毎年7月に「武徳会青年演武大会」(写真-3)が催され、岡山・広島・津山・鳥取・倉敷の神伝流、和歌山の岩倉・能島流、津の観海流、水府流、向井流など西日本の広い範囲から師範が集まり、日本水泳の大会が行われた。主な種目としては、配膳游、御前游、立游、水書など古代泳法が披露されたとの記録がある。また、1914年には大正天皇の皇子であった裕仁親王、秩父宮、高松宮の三皇子が当地を台臨されたほか、1933年には当時大日本武徳会総裁を務めていた皇族軍人である梨本宮守正王も台覧している⁵⁾。このように当時極めて高い位に属する皇族の台覧があったことは、当地が全国的にも相当の知名度を獲得していたことを意味しているものと言える。なお、ここでは厳重な警備のもと、一般観客には正装が求められたとあるが⁴⁾、このスタイルはイギリス王室主催の伝統ある競馬の祭典「ロイヤルアスコット」に通ずるものがあるとも考えられる。

4) 「御殿」の立地と「大正の御大典」(写真-4)

この時期には夷川船溜りに「御殿」という名をもつ特徴的な施設が整備されていることがわかった⁴⁾。この「近代和風建築」は、水泳講習の指導員の監視場所、あるいは休憩所、事務所として利用されていたものである。冬期には夷川船溜りの足場を保管するための倉庫としても利用された。これは、夷川船溜りから約1km西にある京都御所において大正4(1915)年に開催された「大正の御大典」を意識したものを新築し「御殿」と命名したことなどが推察されるが、その経緯については明確にはなっていない。同時代に開催された「大正の御大典」を想起させるような「御殿」という大胆な呼称をもつ施設が立地していたことは当地の重要な特徴の1つと位置づけられる。

5) まとめ

以上より、戦前の夷川船溜りにおいては、先進的な運営のもと西日本を代表する水泳大会開催地の1つへと発展し、市民のみならず全国的な知名度を得、さらには皇室の観覧や「御殿」の立地といった高いステータスを獲得していったことがわかった。

(2) 戦時中の夷川船溜り

このように目覚ましい発展を遂げた水泳講習場であったが、1937年に勃発した日中戦争とその後の第二次世界大戦により、夷川船溜りは1938年以降、徴兵令適齢者の水泳訓練所となった。



写真-3 武徳会青年演武大会(1942年撮影)⁷⁾



写真-4 夷川船溜りの「御殿」(1950年撮影)⁷⁾



写真-5 空砲発火(1942年撮影)⁷⁾

名称も「壮丁游泳大演習」と改められ、短期間での水泳習得が目指されるとともに、講習には担銃渡游、空砲発火(写真-5)、水中戦闘教練など戦時色の強い項目が加えられている。同時に、婦人部は廃止となった。

(3) 戦後の夷川船溜り

1) 市営による水泳講習

戦後、大日本武徳会はGHQにより解体され夷川船溜りでの水泳講習は京都市学務課によって運営される⁶⁾。本研究におけるヒアリング調査¹⁴⁾の結果、夷川船溜りは市による運営期(1947-52年)に全ての京都市立小学校の水泳講習場となり、さらに大々的な水泳競技場化計画が存在していたことがわかった。すなわち、京都を代表する水泳場としての地位は存続し、さらに大規模な施設としての将来計画も立案されていたのである。この時期には遊泳大会も「游泳大会」の名称で復活を遂げている。

2) 社団法人京都踏水会による水泳講習

a. 社団法人京都踏水会の発足

夷川船溜りにおける市営の水泳講習において、その指導は既に解体された大日本武徳会遊泳部時代のOBらが行っていた。しかし、京都市の人事異動によって水泳の不得手な職員が指導員となることもしばしばあり、京都の水泳の衰退が懸念された。そこで、大日本武徳会遊泳部のOBからなる「踏水会」は、京都市学務課に働きかけ、1952年に「社団法人京都踏水会」を結成し、水泳場の経営と指導を担当することとなった。

b. 講習生の増減と新施設の増設

一方、講習生数の変遷に着目すると、1955(昭和30)年に大幅に増加していることがわかる(図-2)。ヒアリングの結果、この背景には、洞爺丸事件(1954年9月)、及び紫雲丸事件(1955年5月)という2つの大きな海難事故の発生があったことがわかった¹⁴⁾。この事故は当時マスコミにおいても大々的に報道され、海難に対する備えの重要性が社会的に再認識されたことが、市民の水泳熱を高める要因の1つとなったものと考えられる。

このような講習生の急増により、既存の施設では十分な運営が困難となり、京都踏水会は1960年6月18日にスタンドと脱衣場を新設している(写真-6)。これは鉄筋2階建、間口20m、奥行き9m、収容人員約1000名という大規模のものであり、1階内部に脱衣場、2階内部には会議室があり、練習風景を眺めながら講義を受講できるという特徴的なものであった¹¹⁾。約500万円の工費の一部には踏水会講習生からの寄付が充てられ、当該施設の充実には法人のみならず講習生からも協力していたことがわかる。

3) 水泳講習の衰退・消滅と各施設の取壊し

このように戦後も隆盛をきわめた夷川船溜りの水泳場であったが、1969年にはその歴史を終えることとなった。昭和初期は水質に問題はなく、夷川船溜り水底に繁茂する藻やオイカワ、ハエナ

どの小魚の姿も確認することができたが、1965年頃から水質汚濁が徐々に問題視され始め、さらに土砂流入によって水深が3mから1m前後にまで減少するなど使用性にも問題が生じ始めた。さらに、1966年には京都市民の飲料水供給を目的として太秦に山之内浄水場が建設され、夷川船溜りはその取水口としての役割を担うこととなる。当時の環境問題に対する意識向上もあり、浄水場

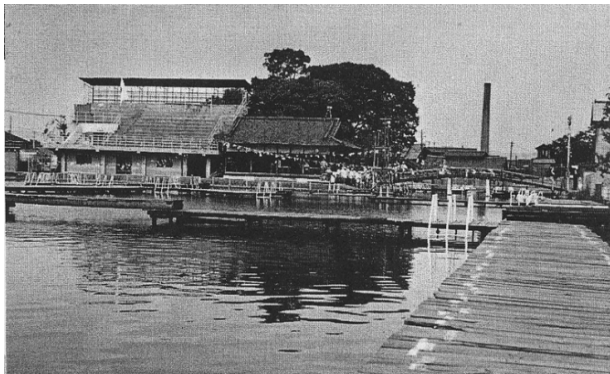


写真-6 スタンドと脱衣場(1968年撮影)⁶

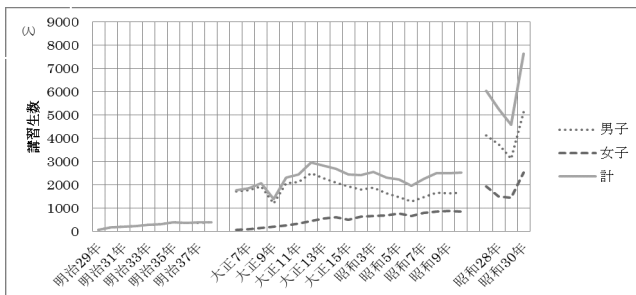


図-2 講習生数の変遷(文献4)-7より筆者作成

水泳場 落第です

左京 電近で迫った水泳シーズンを前に、左京保健所では、高野川の二万五千立方メートルの汚染水を浄化した水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。

左京 電近で迫った水泳シーズンを前に、左京保健所では、高野川の二万五千立方メートルの汚染水を浄化した水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。

大腸菌がウヨウヨ

踏水会などへ禁止要望

保健所調べ

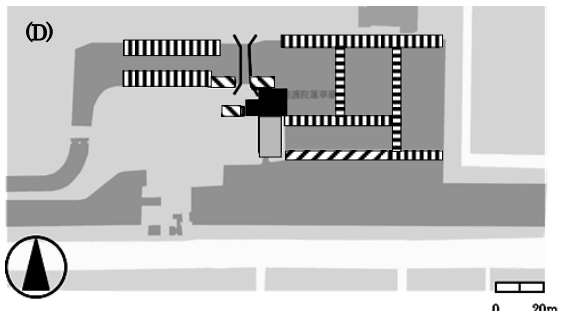
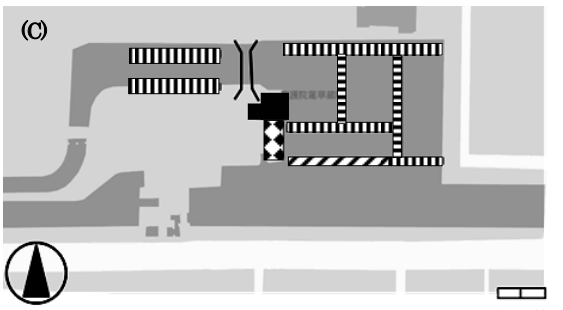
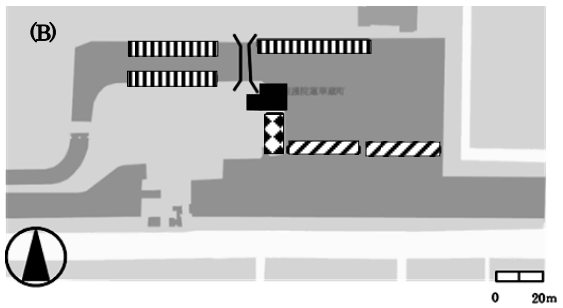
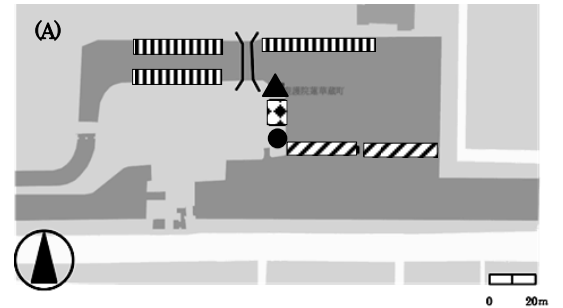
水質検査を受けたのは、聖護 大腸菌群の五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。

左京 電近で迫った水泳シーズンを前に、左京保健所では、高野川の二万五千立方メートルの汚染水を浄化した水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。保健所では、高野川の水質検査の結果、大腸菌が五倍に達している。

図-3 夷川船溜りの水質問題に関する記事 (京都新聞1969年6月24日号)

の取水口で水泳が行われることに違和感を唱える市民感情も次第に高まっていったものと考えられる。

このような背景のもと、夷川船溜りの取水口付近における水面利用に著しい制限がかけられ、これによって面積縮小を余儀なくされた水泳場の収容人数も減少する。この対応策として踏水会は夷川船溜りに加えて若王子、南禅寺、上京、下京、伏見の5カ所において新たなプールを整備することとなった。これによって、夷川船溜りの水泳場としての相対的地位は徐々に低下していった



	足場	///	丸太	■	脱衣所	●	相撲場	■	御殿
■	スタンド	▲	指導員室	■	初心者用プール				

(A) 1896-1914
 (B) 1915-1954: 「御殿」の整備、指導員室の解体
 (C) 1955-1959: 講習生急増と足場の増設
 (D) 1960-1966: スタンド、及び初心者用プールの増設

図-4 夷川船溜り「水泳場」の変遷

ものと考えられる。

さらには、1969年6月、京都市左京保健所による夷川船溜りの水質検査が実施され、一般細菌と大腸菌の問題が表面化した(図-3)。これによって夷川船溜りでの水泳講習は京都市衛生局により禁止されることとなり、水泳場としての歴史に幕を下ろすこととなった。同時に、夷川船溜りに立地していた特徴的な施設も解体される。なお、1968年には夷川船溜り北側に新たな温水プールが整備され、水泳講習自体は存続した。

5. 夷川船溜りの空間構成の変遷

以上の歴史的経緯に加え、夷川船溜り内の施設変遷について、踏水会史⁴⁾に掲載されている写真より判読し、ヒアリング調査¹⁴⁾を加え、空間構成の変遷を概念図化した(図-4)。(A)水泳場発足当初から北側には足場が、また南側には丸太が設けられ、当時は相撲場や指導員室が個別に設けられていたことがわかる。(B)その後1910年代に入ると「御殿」が整備され、指導員室などの役割を担い旧指導員室の位置に置き換わる。(C)講習生数急増する1950年代には足場も増設され、さらに(D)1960年代には初心者プールも設けられていくことがわかる。

表-1 夷川船溜り以外9か所の船溜りの概要

船溜り名	位置	形状	現存状況
四ノ宮	山科区	矩形：約23m×約36m	現存
諸羽	山科区	矩形：約12m×約21m	一部現存 (東山自然緑地)
御陵	山科区	(不明)	現存
日ノ岡	-	三角形：長辺約90m	撤去
蹴上	東山区	三角形：長辺約45m	面積縮小
南禅寺	左京区	矩形：約54m×約54m	現存
五条	-	矩形：約17m×約260m	撤去
稲荷	-	矩形：約21m×約30m	撤去
墨染	伏見区	L字型：約36m×約92m	現存



写真-7 現存する船溜り(夷川以外6ヶ所)

上段(左) 四ノ宮 (右) 諸羽
中段(左) 御陵 (右) 蹴上
下段(左) 南禅寺 (右) 黒染



写真-8 東山自然緑地

表-2 夷川船溜りの変遷のまとめ

年	運営組織	夷川船溜りの変遷	当該地まつわる世相	夷川船溜りの社会的位置付け
1896	大日本武徳会游泳会	・水泳講習開始 ・游泳大会開催		京都市民への水泳普及の場
1897		・演武大会の開催		西日本水泳の中心地
1915		(この頃、「御殿」の整備)	京都御所で大正の御大典開催	
1937				軍事訓練場
1938		・水泳訓練所	東京オリンピック返上	
1939			第二次世界大戦	
1941		(演武大会の中止)		
1945				
1947	京都市	・京都市内の学校の水泳授業に利用		京都を代表する水泳講習場
1949				
1952				
1954	社団法人京都踏水会		洞爺丸事件	
1955		・講習生の急増 ・夷川船溜りに足場設置	紫雲丸事件	踏水会の一つの水泳講習場
1960		・スタンド竣工		
1966		・山之内浄水場の取水口に		
1968		・夷川船溜り北側に温水プール竣工		(廃止)
1969		・夷川船溜りの水泳講習場を廃止		

6. 他の船溜りにおける水泳講習

琵琶湖疏水沿川には計10か所の船溜りが整備されている(表1)。うち3ヶ所は撤去もしくは水道施設などに改造されており、7ヶ所が現存している(写真-7)。

このうち、四ノ宮、諸羽、御陵船溜りは1953年から1963年まで周辺小学校生の夏休みの水泳場として利用されていたことがわかった¹⁵⁾。これらは夷川船溜りのような大々的な水泳講習ではなく、現存する矩形の水面を利用した程度の簡易なものであった。

その後、1960年代からは各小学校にプールが整備され始め、各船溜りでの水泳練習の機会は減少していき、さらに前述の1966年には安全・衛生面への配慮から疏水での水泳は禁止されることとなった¹⁶⁾。

なお、1970年には国鉄東海道線の複々線化と湖西線の新設工事によって、疏水の一部がトンネル化されることとなり、廃川となる四ノ宮船溜り下流～諸羽船溜りの一部までの区間が埋め立てられ「東山自然緑地」(写真-8)として整備される。これによって、船溜りの一部は水辺としての機能をも消失するに至っている。

7. 結語

以上、夷川船溜りの変遷をまとめると表-2のようになる。夷川船溜りは時代背景の変化とともに水泳場としての新たな役

割を担いながら発展してきたことがわかる。船溜りという本来の機能が形づくった矩形水面という特徴を存分に活かし、水泳講習場という人間活動の場として展開したことは、他の船溜りには見られない特徴的な再利用の歴史であるといえる。本来の機能の変容と新機能の発展との関連は、新旧機能の相克あるいは重層を考察する上できわめて重要な研究課題であるが、本研究ではこの詳細について情報を収集することができなかった。今後の重要な課題として位置づけたい。

現在、船溜りはその輪郭のみを残し現存しているが、このようにユニークで輝かしい歴史については十分な伝承がされているとは言えず、むしろそれは人々の記憶から徐々に消え去ろうとしている。琵琶湖疏水関連施設すなわち「土木遺産」としての価値も重視すべきであるが、元来の目的である「疏水船溜り」なる土木施設としての機能を全うすべく整備された空間を巧妙に再利用し、しかもそれを全国有数の水泳の聖地にまで昇華し、さらに皇族が訪れるほどのステータスを当地に与えていたこともまた、当地の誇るべき輝かしい歴史の1つと言えないだろうか。水泳場という機能は、4章(1)1)で示した「水泳に適したスケールの水辺空間」という夷川船溜りの具備する空間的特性を反映したものであった。同時に、推定の域を出ないものの、4章(1)3)及び4)にて示した「皇族の来臨」と、当地の「京都御所近傍」という立地特性の間には何らかの関連を見出すことができないだろうか。当地にて水泳が開始された1896年は、1869年の「東京遷都」から僅か27年の後であり、旧皇居・京都御所に近い当地は現在以上に「皇室」という文脈を強く残していた可能性が推察される。実際、京都御苑の整備は1877年に始まるが、明治20年代末(1890年前後)までは、未だ2・3の公家屋敷が京都御所周辺に現存していた。この経緯が、「かつての皇居」から僅か1km足らずの位置にある夷川船溜りへの皇族の来臨を促し、ひいてはそれに伴う当水泳場の知名度を一層向上させていたことも推察されるだろう。しかしながら、本研究においてはそれを実証する歴史情報の獲得には至らなかった。今後の重要な研究課題の1つとして位置づけておきたい。

なお、この土木空間再利用の風景はまさに「水泳」という庶民的生活の一部によって形成されたランドスケープである。このような特徴的なストーリーをもつ実在の空間として今もなお存在し続けている夷川船溜りの空間は風景遺産(ランドスケープ遺産)として貴重な価値を我々に伝え続けている。

現在、日本造園学会関西支部においても「ランドスケープ遺産インベントリーづくり」が進行中であるが、このように一見見落としがちな身近な風景遺産にも着目していく必要があるであろう。京都の近代史を明確に反映した貴重なランドスケープ遺産の1つとして、夷川船溜りが価値づけられていくことを願っている。

謝辞: 本研究の遂行にあたり、京都踏水会水泳学園学園長 村田弘武様には多大なるご協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 田中尚人・川崎雅史・安田幸生(1999)「琵琶湖疏水舟運と都市形成に関する研究」, 土木計画学研究・講演集, 第22号
- 2) 田中尚人・川崎雅史・鶴川登紀久(2000)「舟運を基軸とした京都高瀬川沿川の都市形成に関する研究」, 土木学会土木計画学研究論文集17
- 3) 京都市文化市民局文化財保護課(2005)「京都市の近代化遺産 産業遺産編」
- 4) 京都踏水会編(1958): 踏水会六十年史: 京都踏水会
- 5) 京都踏水会編(1975): 踏水会八十年史: 京都踏水会
- 6) 京都踏水会編(1985): 踏水会九十年史: 京都踏水会

- 7) 京都踏水会編(1995): 踏水会百年史: 京都踏水会
- 8) 読売新聞1887年8月2日号
- 9) 読売新聞1954年9月27日号
- 10) 読売新聞1955年5月11日号
- 11) 京都新聞1960年6月18日号
- 12) 京都新聞1969年6月24日号
- 13) 京都新聞1969年8月19日号
- 14) 財団法人京都踏水会水泳学園学園長へのヒアリング(2011.10.25)
- 15) 京都市聖護院老人いこいの家における、京都市在住50年以上の古老5名へのヒアリング(2011.12.9)
- 16) 滋賀県厚生部編(1972): 琵琶湖水質調査結果報告 昭和41年度～昭和45年度: 滋賀県厚生部
- 17) 絹田幸恵(1990): 荒川放水路物語, 新草出版
- 18) 岡田昌彰(2003): テクノスケープ～同化と異化の景観論: 鹿島出版会
- 19) 村山保(1961): 学校用水泳プールの設計: 理工図書
- 20) 建築思潮研究所(1993): 建築設計資料(41) 体育館・武道場・屋内プール: 建築資料研究社
- 21) 京都市水道局編(1990): 琵琶湖疏水の100年: 京都新聞社
- 22) 田中治兵衛(1895): 新撰京都古今全図

補注

- (1) 参考文献19)の執筆年は夷川船溜りの水泳場発足年と隔たりがあるが、河川などを利用した競泳用プールの条件を参照する上では有益であると判断し、この数値を用いて考察を加えることとした。